

真言律宗

小田原山

浄瑠璃寺



京都南山城・当尾の里

浄瑠璃寺（九体寺）

この寺は京都の最南端、奈良との府県境に位置している。そしてこの一帯は古来より南都（奈良）仏教の聖地として大寺の僧が世俗の喧騒を離れ修養、研鑽のため出入りをした地域で小田原別所と呼ばれていた。

また創建時のご本尊が薬師仏であったことから、その浄土である浄瑠璃世界が寺名の由来とされている。

その後九体の阿弥陀仏とそれを安置する堂を建立し、庭園が整備され、京の都より三重塔が移築された事により今も残る伽藍が出来上がったとされている。



方三重塔

方九体阿弥陀堂



諸堂の主尊

冒頭にも記した通り、当山は池の東側に位置する三重塔と、そこに祀られている薬師仏、中央の宝池を挟んだ西側に本堂と九体の阿弥陀仏、更に北側には南向きの大日如来像を祀る灌頂堂を含んだ三つの堂塔が現在の主要伽藍となる。

薬師仏は東方浄土の教主で現実の苦悩を救い目標の西方浄土へ送り出す遣送仏、阿弥陀仏は西方にある理想の世界、極楽浄土へ迎えてくれる来迎仏である。また大日如来は真言密教の最高位の仏で、宇宙全体の生命の根源として全ての世界を包む存在とされている。

この配置は平安時代、日本で最初に九体の阿弥陀仏を祀った藤原道長建立の法成寺(今は廃寺)と共通する。



上) 薬師如来像
下) 大日如来像



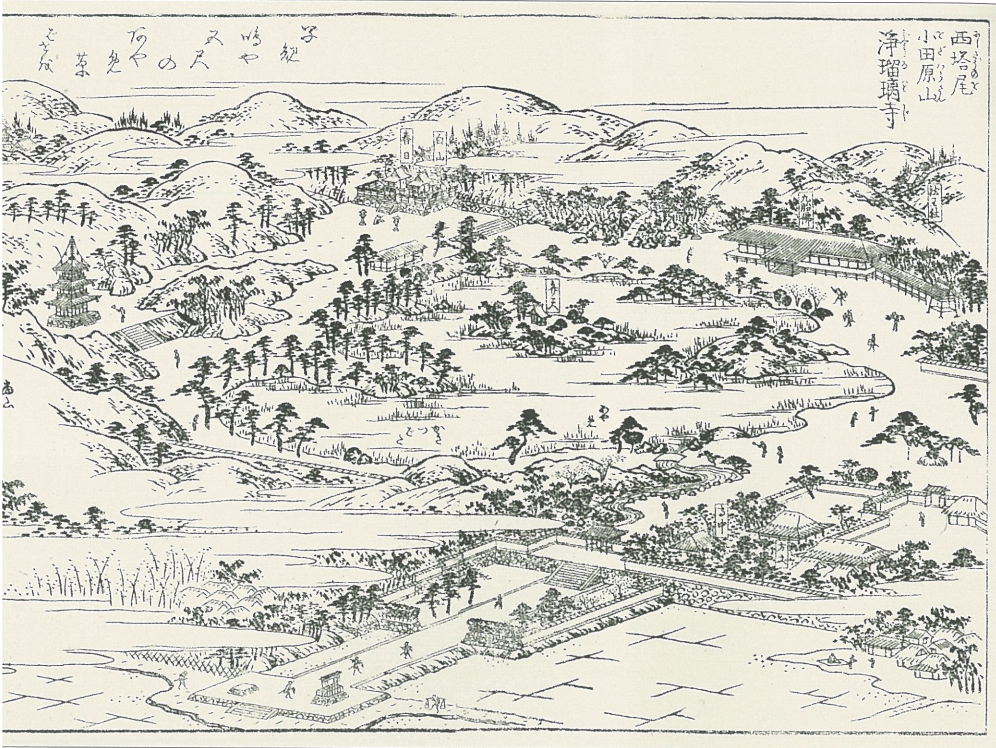
九体阿弥陀仏

浄瑠璃寺の庭園

湧水をたたえる池を中心としたこの庭園は興福寺の僧であった伊豆僧正恵信が久安六(一一五〇)に入寺し、伽藍や坊舎を整備し結を正すなどをした時に始まる。

阿弥陀堂を東に向け、その前に苑池を置き、岸の東に三重塔を配し、主要伽藍とする。

鎌倉のはじめ元久二年(一一〇五)少納言法品が石を立てるなどしそれを補強する。その後園に関する文献の記録はほぼ残っていないが昭和二十年代の実測調査をもとに昭和五十年には数百年ぶりと思われる大規模整備を行い州浜等を復元。更に平成二十二年より再整備を行い現在に至る。



島編『拾遺都名所図会』
(1787)刊

に本堂南側に春日・白山の鎮守社が。
]を入ったすぐ右手には護摩堂が建っている。

中島



伽藍（境内配置）について

浄瑠璃寺



〈図1〉

法隆寺金堂



〈図2〉

◆東の薬師、西の阿弥陀

浄瑠璃寺の伽藍配置は、池を中央にして東に薬如来を祀る三重塔が、西には阿弥陀如来九体を安する本堂がある。

古い寺院の金（本）堂や、都の大極殿などは南面原則であるが、平安時代の中頃から京都を中心に、弥陀如来を東面にまつり、その前に池を造る型がてくる。平等院鳳凰堂（阿弥陀堂）など、その典型である。

奈良の法隆寺金堂では、東に薬師、中央に釈迦（尊）、西に阿弥陀の三如来が南面に祀られている。

太陽の昇る東方にある浄土（浄瑠璃浄土）の教主薬師如来、その太陽がすみ沈んでいく西方にある浄土（極楽浄土）の教主が阿弥陀如来である。

◆お彼岸

平等院でもこの寺でも、古来、人々は浄土の池のから彼岸におられる阿弥陀仏に來迎を願って礼拝した。今も薬師の前から池越しに午後の太陽の軌道みていると、春分・秋分「彼岸の中日」には九体仏の尊、來迎印の阿弥陀仏の後方へ沈んでいくことがある。

◆過去世・現世・來世

東の如来「薬師」(1)は過去世から送り出してくる仏、過去仏という。遠く無限に続いている過去の縁、無知でめざめぬ暗黒無明の現世に光を当て、さに苦悩をこえて進むための薬を与えて遣送してくれる仏である。

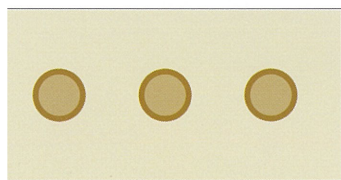
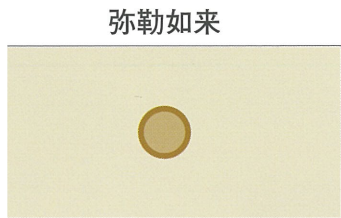
苦悩の現実から立ちあがり、未来の理想を目指して進む菩薩の道を、かつてこの世へ出現して教えたのが「釈迦」(2)であり、やがて将来出現してくれるのが「弥勒」(3)で、共に現世の生きざまをえてくれる仏、現在仏という。

西の如来「阿弥陀」(4)は理想の未来にいて、すんでくる衆生を受け入れ、迎えてくれる來世の仏、來仏、また來迎の如来という。

以上のことがそのままの形で表されているのが（2）の法隆寺金堂内や（図3）の興福寺五重塔内・般寺石塔の四面等である。

また（図4）の唐招提寺の伽藍のように諸尊の名多少変わるが大きな意味では同じ例もある。

招提寺



講堂

金堂

薬師如来

盧遮那仏

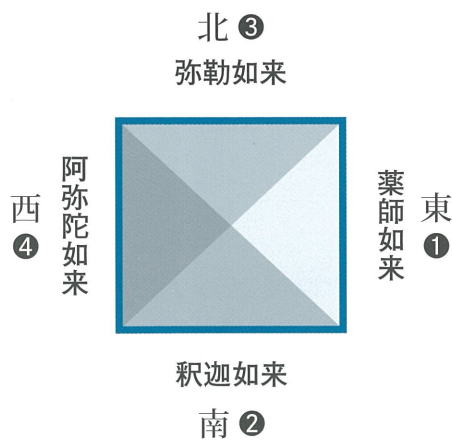
千手観音

（釈迦の本地仏）

（阿弥陀の慈悲の象徴）

顕教四方仏

（興福寺五重塔内
般若寺石塔など）



〈図4〉

〈図3〉



子安地藏菩薩像



阿弥陀如来中尊像



西方九体阿弥陀如来像（九体阿弥陀堂内）

●九体阿弥陀如来像（国宝）藤原時代

平安期の堂・像共に現存するものとしては唯一となった九体阿弥陀仏。西の本尊で、未熟なたちを理想の未来へ迎えてくれる如来。

“観無量寿経”にある九品往生、人間の努力心がけなど、いろいろな条件で下品下生からじまり、下の中、下の上と最高の上品上生ま九つの往生の段階があるという考えから、九の如来をまつた。中尊は丈六像で来迎印（生印）、他の八体は半丈六像で定印（上生印）結んでいる。当寺以外の九体阿弥陀仏は、平期の石仏が九州に、また江戸期の木造仏が東（世田谷の九品仏・浄真寺）に残っている。

●九体阿弥陀堂（国宝）藤原時代

当時、京都を中心に競って建立された九体阿弥陀仏をまつるための横長の堂で、現存する唯一のもの（正面十一間、側面四間）。太陽の沈む方浄土へ迎えてくれる阿弥陀仏を西に向かつて拝めるよう東向きにし前に浄土の池をおき、の対岸から文字通り彼岸に來迎仏を拝ませるにしたものである。

一体一体の如来が堂前に板扉を持つ。

●阿弥陀如来中尊像（国宝）藤原時代

本堂内中央に座し、一際大きい中尊像。

千体の阿弥陀仏の化仏と四体の飛天を配した背がある。光背自体は後補で、飛天のみ当初ものを流用したと見られる。

また、像の胎内に納められていたとされる阿弥陀仏の版画（印仏・摺仏）が明治期に巷に多流出している。（尚、九体の阿弥陀仏は平成三年度より修理・修復のため年に一〜二体ずつを出られる予定）

●子安地藏菩薩像（重文）藤原時代

現在、中尊の横に立つ子安地藏と呼ばれる腹を巻いた地藏さま。片手に如意宝珠を持ち、方は与願の印を示す。木造で胡粉地に彩色された美しい和様像。

●不動明王 矜羯羅童子 制多迦童子（重文）鎌倉時代

元護摩堂の本尊であるこの三尊像は、力強い情、鋭い衣紋の彫り、玉眼の光、迦楼羅光背ど鎌倉時代の特徴をよく顕わした秀像である。

向いて右こやきしハ冷羯羅童子、左こ引恵



秘仏・大日如来像

1月8日9日10日の3日間



秘仏・吉祥天女像

1月1日～1月15日
3月21日～5月20日
10月1日～11月30日



秘仏・薬師如来像

毎月8日、彼岸の中日
※1月のみ1・2・3日と8・9・10日
(いずれも好天に限る)



四天王像 一前・持国天、後・増長天



不動明王三尊像

杖をもった力強い制多迦童子を従えている。

このような三尊像の場合、向って右側が慈悲また左側は知恵の象徴であることが多い。

●四天王像 (国宝) 藤原時代

四天王は元来世界の四方を守り、外から悪がらぬよう、内の善なるものはひろがるようにいう力の神。

この寺の像は藤原期四天王の代表像で、全身施された截金^{きりかね}を交えた甘美な彩色が残る。足下にふまれた邪鬼^{じゃき}の表情も豊かである。

現在多聞天・広目天が国立博物館に。堂内に持国天と増長天がまつられている。

●三重塔 (国宝) 藤原時代

平安末の治承二年(一一七六)、京都一条太から移されてきたもの。初層内は扉の釈迦八相四隅の十六羅漢図などと、装飾文様で壁面がめられている。元は仏舍利を納めていたと思われる。この寺へ来てからは東方本尊の薬師仏安置している。

(●十六羅漢図は、重立

(※●は国宝・●は重文・○はその他)

秘仏と開扉日

●秘仏・薬師如来像 (重文) 藤原時代

東の本尊、三重塔内に安置されているこの像は九体阿弥陀仏より六十年前に造顕されたこの寺のはじめのご本尊。遠い昔からつみ重ねられてきたいろいろな力を私たちに持たせてこの現実へ送り出し、さらに現実にある四苦八苦をのりこえる力を薬として与えてくれる仏さま。太陽の昇る東にいて遣送^{けんそう}の如来ともいう。

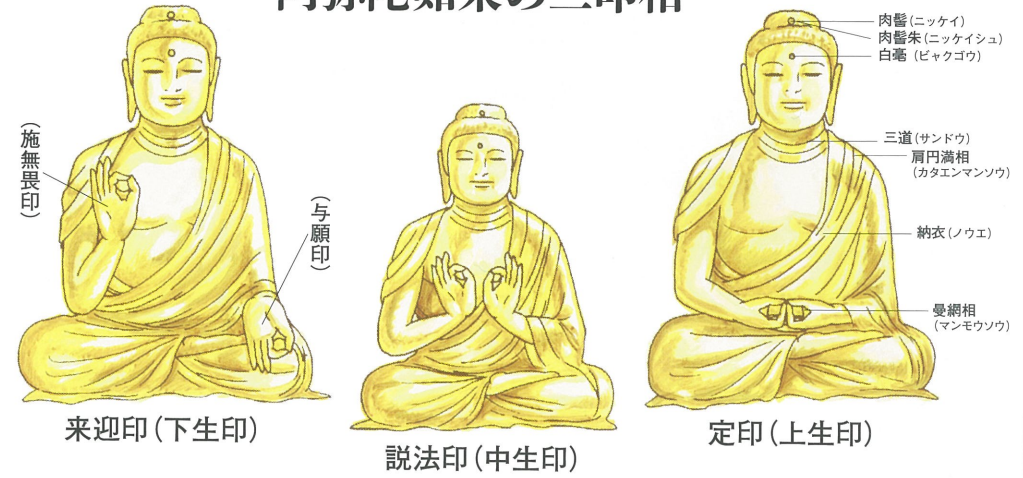
●秘仏・吉祥天女像 (重文) 鎌倉時代

風雨順時、五穀豊穰、天下泰平。豊かな暮らしと平和を授ける幸福の女神。南都の寺々では正月にそういう祈願の法要をするのが伝統で吉祥天の像は多い。この寺の像は建暦二年(一一二二)にこの本堂へまつられたことだけが記録に残されている。(周囲の厨子絵は復元模写されたもの)

○秘仏・大日如来像 平安末～鎌倉時代

江戸初期、慶安五年(一六五二)に建立された灌頂堂^{かんじょうどう}のご本尊。智拳印を結ぶ金剛界の大日如来。平成に解体修理を行い、その作風、構造から平安末期の慶派の仏師の作と推定される。

阿弥陀如来の三印相



◆如来(仏)と菩薩

釈迦の教えに従ってすすむ人を菩薩と呼び、その道程を菩薩道という。その道の最終目標を、煩惱の河を渡ると考えて向こう岸、彼岸という。彼にまで到達し完成した偉大な人格を如来(仏)という。

その礼拝の対象となる如来像は、装飾もなく大きな徳と次元を超えた知性を示す二重の頭(肉髻)、彼岸へ到達した象徴の、指の間の膜(曼網相)をもち普通の眼で届かぬ所を見とおす光を放つ眉間の白毫や、円満な人格の完成のどの三つの輪であらわすなど、いろいろめでたい相(すがた)を持っている。菩薩は飾りをつけ、肉髻と曼網相を持たない。

◆明王と天

菩薩の道の途中にある障害や悪魔をのりこえ、たたかえるたくましい力、知恵の仏が怒りの「明王」であり、まわりでわれわれの前進をたすけ、まもりはげましてくれる神々を「天」(多聞天・吉祥天など)という。

◆如来の印相

曼網相のある如来の手にはいろいろな形があり、それぞれたいせつな意味を表わし教えている。中でも三つの基本的な手の形が、「座禅の形」、胸の前で両手に両手首のくる「説法印」、一方は指を上に向け、もう一方は下に向け「施無畏・与願」といわれる印相である。

図のように親指と人指し指などをまるくしているのは阿弥陀如来で、その場合、座禅一定印は上生印、説法印は中生印、施無畏・与願を下生印(来迎印)と呼ぶ。上生とは理想を目指し自ら向上すること、高い次元へ昇ること、下生とはおくれたもの、あとになったもの、弱いものをひきあげ、たすける働きをさすことばである。中生は説法の印で横にみんなとつながり、たいせつな教を広げていくことといえる。―小田原説法より―

その他の諸仏、諸尊、文化財

○秘仏・弁財天像 鎌倉時代

永仁四年(一二九六)に吉野の天川から勧請されたとの記録が残る像。かつては中島の祠に祀られていたが、現在は灌頂堂に安置。



秘仏・弁財天像

○秘仏・役行者像 室町時代

山岳信仰、修験者の祖と言われる役行者の像。近年の修復の際に前鬼・後鬼像を新たに造顕し、三尊像として現在は灌頂堂に安置。

●浄瑠璃寺流記事(重文) 鎌倉時代

浄瑠璃寺の根本史資料文書。

●石燈籠二基(重文) 南北朝時代

本堂前と三重塔前に阿弥陀仏と薬師仏のお燈明として池の兩岸にある。塔前のそれには貞治五年(一二六六)の年号銘が読める。



塔前の石灯籠

○その他

竟為こは堂前に永二四手(一二九六)の石碑、南照可尔它ム(五卑、

博物館に出ておられる仏さま

●延命地藏菩薩像(重文) 藤原時代

蓮華座の上に立ち、円い頭光を台座からの支柱が支える美しい像である。左手に如意宝珠をささげ、右手与願印で截金を使った多様な彩色文様もよく伝えられている。端正な姿の木彫りで延命地藏と呼ばれる。東京国立博物館に出ておられる。

●馬頭観音像(重文) 鎌倉時代

怒りの菩薩、たたかう菩薩ともいう馬頭観音の像はわりあい少ない。この寺には仁治二年(一二四一)、南都の巧匠といわれた良賢。増金、観慶の三仏師がこの地で彫ったことを示す胎内墨書のある四面八臂の木造彩色像が健在するが、今は奈良の国立博物館に出ておられる。火焰光背、蓮座、胎内仏、胎内経巻などもそのまま保存されている。



馬頭観音像



あしび

真言律宗とは

大和西大寺を総本山に大和・山城・伊賀・河内をはじめ、遠くは福島県いわき市、西は四国・九州までひろがっている奈良仏教の宗派。これは鎌倉時代、南都（大和）教学復興の中心にあった興正菩薩叡尊（一一〇一～一二九〇）の教え、いわゆる西大寺流を伝えるものである。

浄瑠璃寺の歴史抄（太字）

時代	西暦	事項
代	九四六 九八五	現岩船寺阿弥陀如来像造 往生要集できる
安	一〇一一 一〇一三 一〇二〇 一〇四七 一〇五二 一〇五八	この頃源氏物語できる 東小田原随願寺創建 法成寺九体阿弥陀堂供養 西小田原浄瑠璃寺創建（本尊薬師如来） 末法に入る。平等院鳳凰堂造 法成寺、大極殿など消失
平	一一〇七 一一二〇 一一五〇 一二七八 一二八五	浄瑠璃寺九体阿弥陀堂造 中尊寺金色堂造 浄瑠璃寺庭園造、寺観整備 浄瑠璃寺三重塔京都より移建 平家滅亡
鎌倉時代	一二〇七 一二二二 一二二四 一二四一 一二九〇 一二九六	解脱上人海住山寺再興 浄瑠璃寺吉祥天像安置 （この頃当尾の磨崖石仏、次々とできる） 馬頭観音像造 西大寺寂尊九十歳で入寂 弁財天像勧請
南北朝	一二二一 一二五〇 一三六六	浄瑠璃寺不動三尊を迎える 浄瑠璃寺流記事書写 浄瑠璃寺塔前石灯籠造（以下略）

浄瑠璃寺拝観のしおり

●午前九時～午後五時
（但し、冬季12・1・2月は
前後各二時間短縮）

●浄瑠璃世界とは澄みきった
静寂と清浄の世界です

境内では飲食、ラジオ、喫煙など
遠慮して下さい。

本堂内は撮影できません。
携帯電話はマナーモードに。

●主な花

春 あしび、さんしゅう
さくら

夏 あやめ、あじさい
さるすべり、ふよう

秋 はぎ、もみじ、当尾柿
冬 千両・万両（実）、水仙



真言律宗 小田原山

浄瑠璃寺（九体寺）

〒六一九-一三三五
京都府木津川市加茂町西小
電話：〇七七四（七六）二三九〇